

令和５年度旭川未来会議２０３０ 障がい者スポーツ分野 第１回分野別会議 会議録

- 1 開催日時 令和５年６月２３日（金） 午後６時３０分から午後８時３０分まで
- 2 開催場所 旭川市障害者福祉センターおびった２階 会議室３
（旭川市宮前１条３丁目３番７号）
- 3 出席者（参加者） ※敬称略，五十音順
赤堀 達也，麻生 早苗，阿部 龍雄，五十嵐 真幸，内村 隆一郎，
今野 征大，高田 朋枝（オンライン），塚田 鉄平，二條 実穂，藤田 佑平（オンライン）
- 4 出席者（市側）
（運営事務局）
福祉保険部 高越次長
障害福祉課 遠藤障害事業係長，障害事業係 田中，大谷
スポーツ課 松田課長，大野主査，黒墨
（統括事務局）
広報広聴課 山本広聴係長
- 5 会議の公開・非公開 公開
- 6 傍聴者 なし
- 7 意見交換の要点
 - (1) 世界に通用する障がい者スポーツのメッカの理想の未来像
 - ① 障がい者に限らず，誰でも楽しめ身近に親しめること
 - ② 競技スポーツから施設等に入所している重度障がい者まで誰もが楽しめること
 - ③ 誰でもが，障がい者・パラスポーツにアクセスできること
 - ④ 旭川市，旭川障害者連絡協議会，旭川障害者スポーツ協会や旭川パラスポーツ競技会等の旭川市内の関係団体等のネットワークを充実させて，効果的な連携・協働ができること
 - ⑤ 地域スポーツの産業事業化による安定雇用や企業スポンサーの確保等があること
※ パラスポーツ・障害者スポーツに関連した職業としての地域受け皿や構築されたネットワークも含む。
 - ⑥ 障がい者・パラスポーツを通じて地域の課題解決・サポート（施設のバリアフリー化，教育，就職）ができること

(2) 旭川市における障がい者・パラスポーツの現状及び課題

① スポーツの推進のための基礎的条件の整備

- ・ 射撃、クロスカントリースキーの大会等の基準を満たしていない。
- ・ 暖を取る場所がない。
- ・ 陸上競技場のサブトラックがない。
- ・ 冬季に走れる場所がない。
- ・ ゴールボールなどを取り組める施設がない
- ・ カーリング場がない。
- ・ 集客できる体育館がない。
- ・ アイスリンクがあるけど通年ではない。
- ・ パワーウエイトリフティングの用具を使用できる場所がない。
- ・ 必要な移動支援がない。
- ・ 競技スポーツに必要な道具が足りない。
- ・ 需要に応じたスポーツ施設の運用の改善や指導者等の配置がない。
- ・ 「おびった」の予約は、団体ごとに回数制限があるため、充実した活動ができない。
- ・ 車椅子で通える学校が限られている。
- ・ SNS等で情報が得られにくい。
- ・ 本当に知ってほしい人に、情報が伝わっていない。
- ・ 個別・団体をサポートする企業スポンサーが限られており、その情報やネットワーク等がない。
- ・ 障がい者・パラスポーツ産業が限られている。
- ・ スポーツ団体やスポーツ産業の事業者とのネットワークがない。
- ・ パラスポーツ・障害者スポーツに関連した職業としての受け皿がない。
- ・ 教育機関との連携・協働等が行えていない。
- ・ 初級指導員を取った後の資質向上などの系統的な養成システム等がない。

② レクリエーションスポーツの普及

- ・ 養護学校等の生徒や部活との交流をしたいと思っても、校外でのトラブル等が発生したときの対処の課題等があるため、外部との交流が限られている。
- ・ 障がい者・パラスポーツの価値に関する理解が乏しい。
- ・ 利用者に応じたスポーツ施設の運用・改善や指導者（員）等の常駐配置等がない。
- ・ 移動支援は、支援者や関係者だけでは限界がある。
- ・ 移動支援を行える事業所が少ない。

③ 競技水準の向上等

- ・ 旭川発パラアスリートの活用がない。
- ・ 競技開始時からトップレベルに至る身体機能の向上等を目的とした人材養成システムや、必要なスポーツ環境の整備等がないため、持続可能な（国際）競技力向上の取組が行えていない。
- ・ 選手や指導者の確保・育成のため、指導、競技技術の向上やその効果の十分な発揮を図る

上で必要な環境がない。

- ・ 選手や指導者等が生涯にわたり幅広く社会に生かすことができる環境（就労・生活も含む。）が不足している。
- ・ 障がい者・パラアスリートのロールモデルを集約されていない。
- ・ J－STARプロジェクトとの連動がない。
- ・ 円滑に大会等を実施・運営等に対する旭川市の補助が限られている。
- ・ 理学療法士，作業療法士，管理栄養士・栄養士等の専門職は，障がい者・パラスポーツを見る・知る・体験する機会が少ない。
- ・ スポーツ施設と一緒の合宿施設がない。

④ 連携・協働関係等の構築等

- ・ 障がい者・パラスポーツに対する市民の理解
- ・ スポーツ団体，市，協会による意見交換の場がなく，情報の共有等が十分に行えていない。
- ・ 旭川障害者連絡協議会，旭川障害者スポーツ協会や旭川パラスポーツ競技会等の旭川市内の関係団体同士や，その旭川市内の関係団体と旭川市との情報の共有や意見交換等が十分に行えていない。
- ・ 情報の集約や，その集約した情報の継続的な共有が行えていない。
- ・ 組織を超えた横のつながりがない。
- ・ 旭川市各部署間の連携（スポーツ課と障害福祉課の連携の充実等も含む）

(3) その他

- ・ 旭川市の強みである冬季競技スポーツ（バーサーロペット大会の活用）の効果的な活用の検討が必要である。
- ・ スポーツイベント，大会を数多く開催した方が良い。
- ・ 障がい者・パラスポーツ選手・指導者やスポーツの推進に寄与する人材の養成が必要である。
- ・ 市内の教育機関での部活・企業・民間団体等で活動できるサークル等との連携を充実させたい。

8 意見交換等

進行役からの提案により，事前に進行役が作成した「ご意見・ご質問シート」を参加者に配付し，当該会議の開催までに回答を依頼している。

また，当該会議では各参加者が回答した内容を共有しながら意見交換等を行っている。

(1) 議題「旭川市における障がい者スポーツの取組の現状」について

参加者の皆様が考えるテーマ「世界に通用する障がい者スポーツのメッカ」の理想の未来像，参加者の皆様の取り組んでいる活動や支援等の中でテーマに関連した活動や支援等を共有する。

（参加者）

- ・ テーマのメッカについては，障がい者だけのスポーツという認識ではなく，障がいがあっても

も当たり前のようにスポーツに取り組める環境ではないかと考えている。

- ・ 常に色々な人たちが触れ合うことができる環境が、世界に通じるところではないか、それがメッカになるのではないかと思う。

(参加者)

- ・ 旭川市を障がい者スポーツのメッカにするためには、ハード面の整備だけではなく、ソフト面も向上することが重要である。
- ・ 障がい者スポーツに関わっている人だけではなく、市民全体の理解や協力が必要不可欠になる。
- ・ そのためには、障がい者スポーツ分野の発展だけではなく、教育や観光業等の多方面とのコラボレーションなどにより、ともに発展することが旭川市の未来に大きな効果をもたらすのではないか。
- ・ 旭川市においては、観光も充実しているので障がい者スポーツと教育や観光業等とのコラボレーションができる環境にあると思う。
- ・ 障がいの程度等にとらわれず、誰もが通えて楽しめる場や施設等の確保は大きなテーマでもあり、重要なことである。

(参加者)

- ・ 障がい者スポーツのまちとして世界にPRしていくことはすごく良い。
- ・ 旭川市＝(イコール)障がい者スポーツになると理想的である。しかし、障がい者スポーツ人口を増やしても、競技レベルではない障がい者がスポーツから遠ざかると意味がない。障がいの程度にかかわらず、誰もがスポーツを楽しめる環境が旭川市の魅力につながってほしい。
- ・ そのためには、多職種の強みを生かしたいと考えている。
- ・ 障がい者が生活しやすく、移住したくなるようなまちになると良い。
- ・ 自分の活動としては、知的障害アスリートクラブ999の皆様に対するコンディショニングをしている。
- ・ 自分は、2年前から障がい者施設に勤務している。入所者の中には、スポーツがしたいけれどもきっかけが少なく、情報も得られにくい状況にある人がいる。
- ・ 施設の中だけでも行えることや、この利用者にはこんなスポーツができるのではないかな等を考えることが多くなったため、まずは自分が色々勉強して入所者が取り組めるスポーツ等を取り入れて、入所者が社会(施設外)に出やすい環境づくりに取り組むことによって、旭川市内の施設に少しずつ広がることが理想的ではないかと思っている。

(参加者)

- ・ これまで私は静岡、横浜、前橋で勤務したが、障がい者スポーツは旭川市が最も盛んなように感じる。この旭川市の取組を財産として生かしたパラスポーツのメッカを目指すのはとても良い方向性だと思う。
- ・ 自身の活動としては、旭川市立大学短期大学部でも、今年度から初級パラスポーツ指導員の資格を取れるように取り組んでいる。
- ・ 障がいというハンデを持った方々を後方で支える支援者の組織化やシステム化、設備の整備

等をする必要がある。このことについて、資金面での支援が必要になると思うが、旭川市の財政を考えると、なかなか厳しい情勢であることは各参加者も理解しているところではないか。

- ・ スポーツ産業は、圧倒的に狭くて少ない。障がい者スポーツにおいても同様である。
- ・ 障がい者スポーツの個人競技においては、旭川市出身の有名選手は多く輩出されている。この流れをシステム化できないか。また、このことに関わる関係者や支援者等が増えることによって、雇用が生まれ、スポーツ産業の発展につながり、個別の課題や改善にもつながると思う。

(参加者)

- ・ 障がい者と健常者とかにかかわらずに、興味を持った人が色々と取り組めるように良い。
- ・ レクリエーションとしてのスポーツについては、一般のスポーツと障がい者スポーツとの区分け等をしないでスポーツ団体やサークルが活動できると良い。
- ・ 関東のように競技スポーツのオリパラのナショナルトレーニングセンターがあって、国内外のトップ競技者が数多く滞在している環境があると良い。
- ・ また、リハビリテーション施設と一体になった障がい者スポーツセンターがあって、障がいを持つ人が早期に自分に合ったスポーツを見つけられると良い。
- ・ 環境や経済面の格差なく、競技者が安心して競技に取り組める社会基盤が整うと良い。
- ・ 市内のインフラのバリアフリー化が進み、車を持たない人も気軽に好きな場所に出かけられるようになってほしい。

(参加者)

- ・ 自分は旭川障害者スポーツ協会をとおして、スポーツの楽しさを伝えている。また、参加者が全国障害者スポーツ大会に出場することで自覚や自信等が備わり、選手育成につながるよう努めている。
- ・ 自分の年齢だと、一番長く旭川市の障がい者スポーツに携わっていると思う。
- ・ 昔は、障がい者スポーツや支援者等という言葉がなく、支援者はただのボランティアとして活動していた。その後、小学校の敷地内で行われる運動会という形式で行われ、現在の障害事業系の事業に発展している。このときから、移動に係る費用等は全て自費であった。移動支援等の課題は多くあるが、旭川障害者連絡協議会、旭川障害者スポーツ協会や旭川パラスポーツ競技会等の旭川市内の関係団体等がネットワークを構築して、効果的な連携や協働ができると良いと思っている。

(参加者)

- ・ メッカのイメージとしては、障がい者・パラスポーツがただのスポーツとして考えられ、当たり前の世界と思えることではないかと思っている。それはなぜかという、障がい者・パラスポーツは、結局同じスポーツだからである。
- ・ テーマに関連した活動や支援等については、日本代表選手団を招へいし、活動している。また、この活動をとおして、地元の競技者や市民に選手の姿を見てもらうことである。
- ・ ノルディックチーム等の冬季のスポーツの大会や合宿等を誘致・開催の支援、体験会の実施

等をすることが、自分の役割だと思っている。市民に見てもらおうということだけでも意味があると思って、旭川に招へいしている。

(参加者)

- ・ 旭川市の障がい者スポーツ・パラスポーツを考えたときに、ここに関わる関係者・支援者が道内の他の地域に比べて多くいることが強みであり、これをさらに掘り起こすことが重要である。
- ・ メッカをつくるためには、障がい者・パラスポーツに関わる熱狂的なファンをたくさん増やして、関係者のコミュニティを拡大することだと思う。
- ・ この熱狂的なファンを増やすために、①ユニバーサル化、②情報の発信、③旭川市以外のネットワークの構築、④人材育成や道具・設備の充実の4つの視点で進める必要がある。過去の歴史で例えると、秋葉原にオタクが集まるようになったときに、更に熱狂的なオタクが誕生して、そこで多くのビジネスが展開されるようになり、世界の秋葉原になっている。一つのコンテンツとしては、すごいことである。これと同じことができれば、メッカにつながる。

(参加者)

- ・ メッカについては、障がいがある、障がいがないにかかわらず、子どもが小さい頃からスポーツ等に触れられ、成長に合った個別性が競技に取り組めること、誰もが分け隔てなくサークル・クラブ活動等に参加できること、障がいのある人、障がいのない人、支える人や支えを受ける人に分かれることなく、ともに支え合う活動ができることである。

(参加者)

- ・ 自分はA氏と会ってから、障がい者・パラスポーツの世界に入ることになった。ここで学ばせていただいたことは、人と人とのつながりによって、仕事や余暇活動等の社会に参加する機会が増えたということである。障がい者・パラスポーツをツールにして、社会に参加するきっかけ作りができ、これが普及することによって、メッカにつながるのではないかとと思っている。また、各参加者の意見を聞かせていただき、おっしゃるとおりだと思った。

(参加者)

- ・ 単純に、障がい者・パラスポーツに関わりたいか、関わりたくないかではないと思う。熱意のある人だけで、今、グッと盛り上がっている。自分達がいなくなった後も障がい者スポーツが理解され、浸透していくということが大事である。

(参加者)

- ・ 定量的な目標を立てることで明確な方向性を示すことができる。

(進行役)

- ・ なかなか難しい課題かもしれない。第2回会議に向けて、自分から各参加者に、宿題を出したいと思っている。その宿題の一つに「熱狂的なファンを増やす」ということは、どのようなことがイメージするか、例えば、人数であれば何人ぐらいをイメージするか等を、第2回会議の開催案内と一緒に送りたい。
- ・ 第2回会議では、障がい者スポーツ分野が考える2030年の旭川のあるべき姿や、その理

由等について話し合う予定である。

- ・ この宿題は、第2回会議を円滑に進めるためのツールにしたい。

(2) 議題「旭川市における障がい者スポーツの課題の把握及び分析等」について

(参加者)

- ・ 「おびった」の予約は、団体ごとに回数制限があるため、充実した活動ができない。

(参加者)

- ・ 今、ネットで「メッカ」を検索したところ〇〇県がヒットしました。これを例に考えても旭川市においても、何か突出した競技があると良いと思った。

(参加者)

- ・ テーマに関連した活動や支援等における課題の一つは、旭川市に車椅子の学生の通える高等学校がないことである。これは、障がい者・パラスポーツだけではなく、障がい者の日常生活における課題にも直結しているため、何とかしたいと思っている。
- ・ 市内のクラブチーム等でスポーツをしていた学生が、進学して通える高等学校がないため、市外の高等学校に通うことになる。これまで続けていたスポーツを継続することができない。
- ・ また、家庭環境によっては、市内に帰って来られない学生もいる。
- ・ 高校生活3年間を終了して、市内に帰ってきたとしても、スポーツを再開する学生は少ない。
- ・ この空白の3年間が大きい。
- ・ 市内の高等学校は、基本的に車いすの学生を受け入れる環境が整っていない。
- ・ 市内に階段昇降機等の一部の設備が整っている高等学校はいくつかあるが、それを使って支援できる人材等がない。
- ・ 障がい者・パラスポーツを支える企業や人材等が多くいたとしても、学生が通える高等学校がなければ、未来につながらない。ここを改善する必要がある。

(参加者)

- ・ 養護学校等の生徒や部活との交流をしたいと思っても、校外でのトラブル等が発生したときの対処の課題等があるため、教職員はどうしても避けたいと思って閉鎖的になっている。
- ・ その他の課題として、障がい者スポーツの発展には、移動支援等の改善が必要である。

(参加者)

- ・ 小・中・高等学校等で普及啓発を行うことによって、理解と共感を深めてもらうとともに、障がい者スポーツの楽しさや効用を知ってもらい、スポーツを始めるきっかけを提供できる。
- ・ また、企業や大学等によるスポーツへの支援については、地域のネットワークを作る上で、個別・団体をサポートする企業スポンサーの確保等の視点も重要である。
- ・ 地域特性を生かした取組については、競技スポーツ（プロ・アマ問わず）との協働システム作りや、パラスポーツ・障害者スポーツに関連した職業としての地域受け皿作り等が、将来の発展に必要である。

(参加者)

- ・ とともに楽しむということを考えたら、正直スポーツ意外にもあるのではないかと思うこともあるが、スポーツを介していなかったら出会えなかった仲間もいる。
- ・ 色々な体験ができる環境を作ることによって、個人の豊かな生活に近づくものではないかと思っている。
- ・ スポーツを楽しむためには、その楽しむ場所に行くための移動手段であったり、自分の日常生活や仕事にある程度の充実した環境が必要である。
- ・ 相談等を受けたときに、移動手段がないばかりに、何かを諦めなければならないときや、課題を解決してできなかったとき等はとても辛かった。これは、自分の大きな悩みの一つである。
- ・ 市内の移動支援を行っている事業所は少ない。少ない理由としては単価（単位）が安く、自分も移動支援をやろうと思ったが、経営的に成り立たなかったので諦めたことがある。

(参加者)

- ・ 数年前に比べて、ガソリン代がかなり高くなっている。
- ・ 以前は週数回通っていたが、今では週1回程度通うのが精一杯である。
- ・ この移動手段が改善するだけで、障がい者・パラスポーツの参加者の負担が軽減でき、競技力の向上等につながると思う。
- ・ このことについては、支援者だけでは限界を感じる。
- ・ この課題は、高齢者にも同じことが起きており、旭川市全体の課題である。

(進行役)

- ・ 確かに、移動手段の確保は、どの分野においても重要なテーマであり、長期的なビジョンでの取組が必要なことになる。
- ・ 移動手段の確保を行う上でも、支援者や関係機関との連携等は必要である。例えば、学校等に周知するために、事務連絡として伝えた情報が、現場の教師職員等に伝わっていないことが多い。
- ・ 本当に知ってほしい人達に、情報が伝わらない。
- ・ 教育機関との連携・協働等は、本当に課題だと思っている。
- ・ このことを踏まえ、旭川市各部署間の連携も重要な課題と思う。特に、スポーツ課と障害福祉課との連携を充実させてほしい。

(参加者)

- ・ 今回の旭川未来会議は、未来に向けたあるべき姿やその取組について、どのようにすると良いかを考える会議と受け止めている。
- ・ 東京都では、アスリートを派遣する事業等を行ったときに、教育機関等で周知を行うことによって、大人よりも児童や学生の方が、障がい者・パラスポーツに詳しくなっている。若者に向けた普及啓発を行うことによって、未来につながる。
- ・ さらに、普及啓発（パラスポーツ体験教室を開催）については、学校・参加人数に応じた規模を考慮して、障がい者・パラスポーツを熟知したスタッフや現役選手等が企画・運営・指導を行うことによって効果的な取組になる。

(参加者)

- ・ 障がい者・パラスポーツを発展させるためには、障がい者・パラスポーツがビジネスとして成立している状態でないと発展が望めない。
- ・ 自分達の生活が懸かっていると思えば、もっと広がる。ただ、東京パラリンピックのときのように、商売ありきで参入する企業が増えると、訳の分からないことになる。
- ・ 10年以上前から、身近な支援者と話をしていることではあるが、自分は学校の教員をしており、教職員としての業務外で活動しているボランティアである。
- ・ 「何でこんなに大変なことやっているのか。」と言われることが多くある。
- ・ 自分の思いとしては、障がい者・パラスポーツの関係者は、本当のマニアじゃないと成り立たない。
- ・ 旭川市は、一部の熱狂的なマニアが集まったから、今の形になっている。
- ・ これからだと思っている。

(参加者)

- ・ 今すぐに障がい者・パラスポーツ分野のスポーツ産業だけが発展することはない。
- ・ 一般のスポーツを含めたスポーツ業界全体の発展が、障がい者・パラスポーツ分野のスポーツ産業の発展につながる。
- ・ また、個人競技も良いが、野球やサッカー等の団体競技が活躍することによって、スポーツに携わる職業も潤う。盛り上がっている団体競技には、必ず熱狂的なファンがいる。
- ・ 教育機関の部活動は、民間企業等に地域移行を図っている。このタイミングを利用した教育機関との連携を図ることも有効的である。

(事務局（スポーツ課）)

- ・ スポーツ団体やスポーツ産業の事業者との連携・協力の促進等については、本市の事業として具体的な取組は行っていないが、旭川市を拠点として活動するプロバレーボールチーム「ヴォレアス北海道」と連携協定を結んでおり、スポーツの振興、地域・経済活性化、魅力発信など様々な分野において、お互いの活動の充実を図っているところである。
- ・ 今後の連携・協働等を進める中で、障がい者・パラスポーツの発展等に寄与できると理想的だと思っている。

(参加者)

- ・ 障がい者・パラスポーツに関する経験・知識がまだ不足しており、データの蓄積に至っていない。
- ・ 施設内で利用者の客観的評価を定期的に記録し、データを蓄積していく予定である。
- ・ 競技技術の向上やその効果を十分に発揮するために必要なトレーナー、理学療法士、作業療法士、管理栄養士・栄養士等の専門職は、障がい者・パラスポーツを見る・知る・体験する機会が少ない。

(参加者)

- ・ 冬季のスポーツの競技技術の向上やその効果を十分に発揮できる環境の整備等については、自分が習得したコーチングスキル等を指導者等への育成に活用することができる。

- ・ 今すぐには結果が出ずに、次の世代へ引き継ぐことになるかもしれないが、実績のある選手や指導者のデータを蓄積することによって、スポーツに関する実際の・基礎的な研究や、これらの研究の成果を活用したスポーツに関する施策につながるかもしれない。

(参加者)

- ・ 選手として活躍したB氏の軌跡は、データの蓄積にマッチする。

(参加者)

- ・ 自分は仕事は旭川で大工（棟梁）をしていたが、工作中的の事故で車椅子生活になった。
- ・ 当時は、メディアに障がい者・パラスポーツが今ほど露出していない状況だった。
- ・ 大工（棟梁）の仕事と硬式テニスを極めたいという思いが強くあったが、工作中的の事故でこの両方の夢が叶わなくなった。
- ・ その後、偶然にもテレビで車いすテニスという競技があることを知って、すぐに始めることにした。
- ・ この時の心境としては、日常生活への不安よりも、硬式テニスがしたいという思いの方が強かった。
- ・ また、車いすテニスをするのであれば、パラリンピックを目指したいと思い、さらに、きちんとした指導を受けなければ、パラリンピックという場所にたどり着くことができないと考え、現在の拠点に移住した。
- ・ 企業等とのスポンサー契約については、自分がプレゼン等をして、スポンサーを獲得し、プロ生活をしていた。
- ・ 現役を引退した後は、講演会やスポーツ教室等で活動している。
- ・ 自分の人生を通して、知る機会があること（増えること）によって、心理的・社会的・経済的等の取り巻く環境が変わることを学んだ。
- ・ 自分からアプローチして、変わっていくことは誰もができることではないと思うので、情報やサポートがあると良い。
- ・ 障がい者・パラスポーツ等をやりたいけどもできない人にどうきっかけを持ってもらうかが課題だと思っている。
- ・ 東京都では、アスリート本人だけではなく、パラアスリートを支える指導者やサポーター等を『東京パラスポーツスタッフ』として認定し、スタッフの存在や役割、必要性を広く社会に周知し、より活動しやすい環境に改善していくための取組を行っている。
※ 東京パラスポーツスタッフ【<https://www.sports-tokyo-info.metro.tokyo.lg.jp/staff/>】
- ・ このような取組を、旭川市で取り入れるのも良いアイデアかもしれない。

(事務局（スポーツ課）)

- ・ 旭川市では、スポーツ分野で全国的又は国際的に活躍し、多くの人から親しまれている旭川市の出身の方及びゆかりのある方に、旭川市のスポーツ推進に関する活動を広く周知するとともに子どものスポーツへの関心や技術を高めることを目的として「旭川スポーツみらいアンバサダー」に就任していただいている。
- ・ 令和5年6月17日に、プロ野球選手で、阪急、オリックス、阪神で投手として活躍し、現在

（就任当時）は野球解説者や野球評論家として活動している星野伸之氏が就任している。

（参加者）

- ・ テニスの例で言うと、例えばオーストラリアでの大会や日本での楽天オープンなどでは、一般のプロが出場しているテニス大会で、同時に車いすテニスも開催している。
- ・ 一般の試合の合間に車いすテニスの試合を見る機会が増えることによって、興味・関心を持つきっかけにもなり、普段接することがない人達への周知にもつながっている。
- ・ この取組は選手のモチベーションが上がる要因の一つである。

（進行役）

- ・ 競技力向上においては、例えば、ジャパン・ライジングスター・プロジェクト（通称：Ｊ－ＳＴＡＲプロジェクト）の対象選手や実施状況等の情報が伝わって来ない。
- ・ また、Ｊ－ＳＴＡＲプロジェクトの対象に選ばれなかった選手への支援等は、この未来会議のテーマにマッチしており、次の２点が考えられる。
- ・ まず、一つ目は、競技技術の向上やその効果を十分に発揮するために必要なトレーナー、理学療法士、作業療法士、管理栄養士・栄養士等の専門職による支援（サポート）及びその支援（サポート）をつなぐネットワークの構築である。
- ・ そして、二つ目に、Ｊ－ＳＴＡＲプロジェクトの育成選手には選ばれなかったが、もう少し努力すれば、又は専門職による支援等があれば、もしかしたら、Ｊ－ＳＴＡＲプロジェクトの育成選手に選ばれたかもしれない選手への支援である。
- ・ この二つの共通の課題として、競技開始時からトップレベルに至る身体機能の向上等を目的とした人材養成システムや、必要なスポーツ環境の整備等がないため、持続可能な（国際）競技力向上の取組が行えていないことが考えられる。

（参加者）

- ・ 大会の運営や選手が全国大会等に出場する判断の一つとして、それぞれに係る費用等が高くなる場合、大会の開催の中止や出場を諦める選手もいる。必要な補助等があると、この状況が変わると思う。
- ・ 選手や指導者の確保・育成のため、資質を有する者への指導、競技技術の向上やその効果の十分な発揮を図る上で必要な環境がない。
- ・ また、選手や指導者等が生涯にわたりその有する能力を幅広く社会に生かすことができる環境が不足している。

（参加者）

- ・ 国公立大学は、勉強だけでなく、スポーツに係る取組にもっと力を入れた方が良い。

（参加者）

- ・ 連携・協働・関係の構築等について、旭川市は道内の中でもかなり取り組んでいる方だと認識している。
- ・ ただ、札幌市が少しずつ取り組んでいる様子なので、市の財政規模から考えても近々に抜かれる可能性があると思っている。
- ・ 札幌市は、クロスカントリースキーのワールドカップ開催の招致等も成功している。

- ・ 自分は、トップアスリートだけに注目をするのではなく、スポーツを楽しむ階層への支援も必要だと思う。
- ・ また、今取り組んでいる連携・協働等をもう少し充実させて、継続することが本会議のテーマにもマッチしている。

(参加者)

- ・ スポーツ推進委員も年齢が上がると本業が忙しくなるため、障がい者・パラスポーツに費やす時間が限られる。現状と課題については、「するスポーツ」、「観るスポーツ」、「支えるスポーツ」の視点で考えると良いと思う。
- ・ 何よりも、やっぱり、みんなに知ってもらえるとうれしいなっていうのがあって、スポーツに関わることによって、人生が豊かになれるというような地域づくりをしたい。

(参加者)

- ・ 札幌市は、障がい者・パラスポーツに力を入れている。
- ・ 深川市は、スポーツ施設の整備等が充実している。全国的に各団体の業務過多で、情報の共有等が十分に行えない状況である。
- ・ また、それぞれが独立した活動をしているため、必要な人に情報が伝わっていない。
- ・ 例えば、縦や横のつながりを気にしないミーティング等が必要なのではないかと考えている。

(参加者)

- ・ 旭川市の障がい者・パラスポーツの発展には、バーサーロペット・ジャパンがキーになる。
- ・ バーサーロペット・ジャパンは、国内でも旭川市だけの取組である。
- ・ また、クロスカントリースキーの中でも最大級のコンテンツであるため、効果的な取組ができる。

9 第2回分野別会議から第4回分野別会議の検討内容

- ・ 旭川市（スポーツ課・障害福祉課）等に、情報提供してほしいことや質問したいこと
- ・ 障がい者・パラスポーツの理想の未来像を実現させるためのアイデア等（取組等）
- ・ アイデア（目標）の達成度を客観的に判断するための方法（目標数値等）
- ・ 期待される効果
- ・ 最終報告における発表内容を確認
- ・ 感想や意見等

以上